



はじめないことを選んで校庭の青をながめる夏の手ざわり

夏である。

最近の外出ではお水を必ず持つようにしている。

家を出るときに余裕があれば水筒に水をたくさん入れてお水を入れる。お茶やコーヒーを試したけどお水が一番良い。取引先に訪問するとペットボトルのお水を出してもらうこともあり、水筒に注ぎ足すこともできる。もちろん外出先で買うこともできる。

本当なら夏だけが必要ではなく、いつでも持つておく必要があると思う。それは震災がきっかけだった。もし、今、ここで、何かが、起こったら、どうしようと思うことが根底にある。特に電車の中や人間が大勢いる施設などでは、身動きが取れずに水分が取れなかったり、物資があってもその場にいる人全員に行き渡らないこともある。少しでも準備をしておくことで生き延びる可能性を高めることに繋がる。普段は、生きること、生き抜くことをあまり意識していないけど、ふとした時に現れてきて、川に打ち込まれた杭のように、流れていくものをととき堰き止める。そのまま流れて行くときも、しばらく引つ掛かっているときもある。

家を出るときに余裕がない場合は、最寄りの駅の自販機でお水を買ってしまう。お水を買うことはさすがに慣れたけど、「ああ家を出るときに水筒に入れているらこの120円は不要だったな」と思っているら購入の光るボタンを押す。ただ自販機の水は冷えているのでそれを持つだけで涼が取れるという利点があり、120円払って良かったと思うこともある。おでこにユニコーンのように当てたりすることもできる。

外出するときにはたいがいリュックで、その中にいくつかの本が入っている。冷たいペットボトルの水は結露で濡れるため、ペットボトルカバーも用意している。コンビニで伊藤園のおーいお茶を買ったときに付いてきたペットボトルカバーだ。内側がア

ルミになっていて少しだけ保温の効果がありそう。冷たい水を少しでも冷たいままにしたり、温かいお茶を少しでも温かいままにする、そしてリュックの中のいくつかの本を濡らさない機能を持っているカバーは、世界の大発明なのではないかと思うたびに思っている。

その日は家を出るときに余裕がなくて駅の自販機でお水を買った。自販機には同じ種類のものが何本か並び、お水も三本くらい並んでいたと思う。どの場所の水を買うか、どこが一番冷えているか予想をしながら購入する。

「左側の方がよく売れるから補充の頻度も多い」「補充の頻度が多ければ、冷却される時間も短いので冷たくない可能性が高い」「右の方がじっくり冷えている可能性が高い」「でも右利きの人が多いから右側の方が売れるのではないだろうか」「三本並んでいるなら真ん中が無難」など何人かの自分が激論を交わすこと数秒、リスクは取るべきときにとる派が優勢となり、一番右のボタンを押す。

出てきたお水はぬるかった。冷蔵庫が壊れちゃったかなと家なら疑うレベル。冷えていないわけでないけど、いや、やっぱり冷えていない。冷やそうとした形跡はあるようなぬるさ。外気の温度が高いからそう感じるだけなのかもしれないと思って、一口飲んでみるけど、やっぱり冷えていない。冷やそうとした形跡のあるぬるさに変わりはなかった。

光が強ければ影が濃く見えるみたいに、真夏ってこういうときにも感じるんだと、一口だけ飲んだペットボトルのお水を、ぬるい水をぬるいままにしておくペットボトルカバーに入れてバツグにしまった。ぬるいから全然結露もできないけれど。

こうやってその日は始まったのだった。せめて弱冷房の車両は避けて取引先へ向かった。こんな夏も、もう終わりの粒が混ざり始めている。